

【講演会】

## 私の仏教学——自洲と法洲の対峙——

吉 津 宜 英

皆さんこんにちは。多くの方々が聴いてくださり、この大講堂が満杯になっていることにびっくりしております。ただ今、大野栄人禅研究所所長から丁寧なご紹介をいただきました。珍しい名前だと思います。私の寺の本寺が福山市北吉津町にありますので、明治の初め末寺十ヶ寺がすべて吉津姓を名のりました。生まれは大野先生と同じ広島県でございます。新幹線で行きますと岡山、新倉敷、福山です。福山駅で降りて福塩線というローカル線に乗り換え、四十分位北に入ると府中があります。この府中市、人口四万人位の都市ですが、その小さな曹洞宗の寺に生まれ、仏縁をいただき駒澤大学に入学し、教員になりずっと学ばせていただいております。

私の仏教学（吉津）

今日こういうチャンスをいただきましたのも、大野先生はもちろんのこと、多くの先生方とのご縁と思います。今盛んにシャッターをきって写真を撮ってくださいっておりますが、二十歳代からこんな風貌で、五十ぐらいに見られ、写真映りも悪く、大野先生は若々しくて、私より一級下であるなどとは信じられないことです。こちらには私が日頃お世話になっている先生が多いものですから、それだけでも緊張してあがっております。それに加えて公開講座ということで、外来の方々も多くご参集くださいます。光栄の至りです。まあ、ここに立った以上はまな板の上の鯉ですから、ともかく私の話を聞いていただくしかございません。

さて、本題に入りまして、まず紙に書かれているご覧の題とレジユメのそれとは違っているじゃないか、とお気づきかと思いますが、内容的には同じことでございます。学生諸君は私の話を聞いて授業でレポートをお出しになるとうかがっておりますので、私の話のポイントを最初にお話しすることになります。レジユメには載っていないのですが対峙ということです。言葉としては、何かと何かがぶつかり合う、AとBが対峙する。ここでは自分を抛り所とすることを自洲じすといいます。洲すというのは島という字と同じです。自洲じすというのは修行のベースとしての自分を大切にするとのことです。

法洲ほうすというのは、お釈迦様がお説きになった教えです。それを洲すと言い、島であるとは、どういう意味でしょうか。ガンジス川という大きな川を皆さんはインドの地図でご存知と思いますが、この河は大雨が降りますとすぐ洪水になります。少し高い所でないとい水害を受けて危ないので、ですから小高い島が大切なのです。水に流されないように少し小高い所を大切な住居にしているということですよ。

ガンジス川の中流域を教化されたお釈迦様のことを考えてください。そうすると仏教ではバラモン教やヒンズー教などの有神教とは違いますから、何が大切かと言うと、まず仏様と教えと修行者、仏法僧の三宝とも言いますが、法洲ほうすです。そして修行して悟りを開いていくために大切なのが、この自らを島とする、自分を抛り所とする、すなわち自洲じすということ。自洲じすと法洲ほうすが仏教では二つの大きな抛り所であるのです。

自分というのは誰かと言いますと、私は私でございますし、皆さんお一人お一人が自洲じすなのです。仏教は我々一人ひとりが何をやるか、どんな行いをするかを問うわけです。そして自洲じすが何を基準に、何を目的に、何を対象に学び、実践するかというと、これは他ならぬ法洲ほうすであるわけですよ。

お釈迦様が一生の中で三十五歳の時に悟りを開かれて、八十歳まで生きられた。大変なことですね。皆様の中にはかなり私より人生の達人の方がおられるように拝見いたしますけれども、そういう方のお話するのは、正に釈迦に説法でして、これはやりにくいのです。人生を語るに

はちよつと若造でございませし、寺に生まれたからといって仏教を分かっているわけではないものですから、困ったものです。

私が主張したいのは、仏教というのは対話の精神なのだ、お互いに話し合う、お互いに向き合う、これが大切なのだ、ということを一貫して申し上げたいと思います。対峙という言葉は、悪い言葉として使っているではありません。対峙せん。これはある人とある人が向き合う、対話する、という表現でも良かったのですが、私は対峙ということの良い意味として捉え、背中を向けるのではなく、向き合つて、面と向かつていこうということです。

これが仏法の学ぶ姿勢ではないかと考えます。禅のほうでも問答と言います。これは禅僧と禅僧が真剣な会話をすることです。挨拶という言葉は禅の大切な言葉です。挨拶という言葉は漢和辞典で引いてみてください。これは真剣にやりとりして「おはようございます」「こんにちは」と言うところから仏法は始まるということをおうとしていくわけです。禅僧はそういう形で一生懸命、一体自分とは何か、仏法とは何か、真実とは何か、ということを学んで

行こうとしたのではないでしようか。

神様がいない宗教である仏教は、人間と人間とがぶつかっていつて、そしてそこに何か真実である法を自覚する、そういう実践形態しかないので。私たち自身である自洲と、私たちの前におられる、私にとっては今日聴いてくださっている皆様は私にとっては法洲です。私はいささか大きな声でしゃべらせていただいて、皆さん方にとって僭越ではございますが、皆様方にとりまして、お釈迦様には失礼ですが、一応私は法洲の立場としてしゃべらせていただいております、自洲でもおありになる皆様に法というものに関して何かを感じていただければありがたいことです。今日のご縁をいただきましたことは、私にとって聞いていただく皆様は法洲なのでございます。結論的に言えば、お互いにどちらが絶対的に自洲でも法洲でもなく、相互に自洲になったり、法洲になったりしながら、聞法や実践や勉強に努めていると申せましょう。

最初に対峙というのは対話と読み替えていただいていたのだと申し上げておきたいと思えます。これは自らと法だけの問題ではなく、お互いの人間同士、親子、友人、夫

婦、すべてに、対話ということが日本社会において一番求められていることだと思わなければ。どの世界でもそうではないでしょうか。また仏教はそれを一貫してお釈迦様以来説いてきているのではないかということをお話したいと思っております。

大体結論は終わったのでこれで講演を終わってもよいのですが、これで終わると大野先生が飛んで来て「先生、ただたっぷり時間があります」とおっしゃると思いますので、レジュメに添ってできるだけ解りやすくお話ししたいと思います。

「私の仏教学」という題名をつけましたが、これも重く考えていただかなくてもよいです。私がいかに仏教に迫っているかということ。今私が申し上げたことを逸脱し、齟齬するものではございません。レジュメを用意いたしましたから、レジュメに添ってなるべく分かりやすく申し上げます。だいたい大きく、A・B・C・D・Eというふうに分かれております。

A「問題提起」は、あまり言うこともありません。現代の日本社会の中で仏教、仏教者、仏教学者のあり方を誰が

(who)、「いつ」(when)、「どこで」(where)、「何を」(what)、「どのように」(how)、「何故」(why) という5 W 1 H の問いとして考えてみたいのです。

若い一年生の皆さん。この日進校舎の素晴らしい自然の中で学ばれるようになりまして、高校時代とは違う雰囲気の中でいろいろお考えになることも多いのではないかと拝察いたしました。ここに5 W 1 H と書きましたが、やはり我々は日々何かを問うているのではないのでしょうか。今も話をしながら、私も自問自答しております。

皆さん全員、「宗教と人間」を受講されますね。駒澤大学では「仏教と人間」と少し限定した科目名になっていますが、こちらと同様に入学生が全員「仏教と人間」を受講しています。私も一つ担当しております、非常に楽しく講義を進めております。楽しいというのは少し語弊があるかもしれませんが、問題提起のところに書きましたように、いろいろ疑問を出して考えていくということがやはり大切なのではないのでしょうか。

本日の題ではこのように考えたいのです。現代の日本の社会の中で、仏教、あるいは仏教者、あるいは仏教と関係

ない方もたくさんおられるわけですが、今日は禅研究所主催の講演会でございますから、仏教に焦点を当てさせていただきます。端的に言えば、一体おれは何者なのだろうか、という問いもあります。どのように勉強したらよいのだろうか、人生をどのように送ったらよいのだろうか、こういう問いを発しながら勉強していくことは非常に重要なことではないでしょうか。

何かに問いを持つところから学びが始まります。私も問いを持つて学んでおります。問いを持ってはかえつてなかなか分からなくなるわけです。なぜそんなに仏教、仏教と言うのですか、と学生諸君は言いたいかもしれませんね。駒澤大学の学生さんもそう思っている人が多いですね。なぜ愛知学院大学に入って仏教なのだろうか、先生方も考えておられるかもしれませんね。

B 「日本仏教の現状——大きな二つの流れ——」については、現在の日本仏教の中に大きな二つの流れがあるという事です。

B は、1「伝統的な大仏・大法・大僧の流れ」と2「明治以来の近代仏教学の将来と発展」の二節に分かれておりま

す。1は仏教の大切な宝である三宝について、少し耳慣れない言葉ですが、大仏（大きな仏）、大法（大きな法）、大僧（大きな僧）ということ、私は特に大乘仏教について考えております。

仏教では三つの宝物があります。仏様という宝物、教えという宝物、そして修行している人がまた宝なのです。日本の伝教大師最澄もおっしゃっていますね、「修行僧こそ国の宝である」と。皆さん方も宝です。お父様お母様にとつて皆様は宝です、仏法僧以上の宝かもしれません。

大きな三宝の流れ、これは、仏教が日本に伝来したのは六世紀ですが、それ以来ずっと流れてきている、ということとを述べるのがこの1であります。2という明治から日本は国が変わったわけです。歴史で学ばれたように鎖国から開国になったのです。仏教の世界でも、後ほど説明します伝統的な大仏・大法・大僧は中国から朝鮮半島を経て伝わってきました。明治になり、ヨーロッパ世界から、それは全く異質な仏教、近代仏教学が伝わってきたのです。

この近代仏教学を言語で言いますと、スリランカ、ミャンマー、タイなどのパーリ語という言葉を中心に行っている

仏教があります。そしてサンスクリット語という言葉があります。主として大乘仏典がサンスクリットという言葉で書かれています。時代的にはイエス・キリスト様が十字架にかけられた以前の紀元前一世紀ごろに大乘仏教は興起し、サンスクリット語で書かれた文献がたくさん残っているわけです。

そしてもう一つはチベット語です。現在はチベット仏教の最高指導者ダライ・ラマはチベットからインドに亡命しています。このチベット仏教の文献がまたたくさんございます。明治になると、これらの三つの言語の仏教文献がヨーロッパからその研究成果と共に日本国内に入ってきました。これを我々は近代仏教学の流れと呼ぶわけです。

この明治からの近代仏教学の伝来以前の仏教は、百済から日本に伝来してから、聖徳太子の活躍もありましたし、南都六宗・平安二宗、そして鎌倉新仏教へと展開しました。今に至るまで続いているこの仏教を、私は大仏・大法・大僧の伝統仏教と呼ぶのです。なぜ大をつけるのかは後ほど説明しますが、そういう仏教の伝統が現代でも生きているわけです。愛知学院大学、駒澤大学共通に禅宗の中

の曹洞宗という一派が設立した大学であります。曹洞宗もその伝統仏教の一翼を担っているわけです。

しかし、駒澤大学の私たちも、愛知学院大学の禅や仏教専攻の先生方も、この伝統仏教の流れに属しておられると同時に、今や近代仏教学の流れの中にも所属しているわけです。言ってみれば現代の仏教は鳴門の渦潮のようなものであります。どーっと伝統的な仏教が厳然と流れていまして、もう一つ違った方向から近代仏教学が、スリランカ、タイ等から一度ヨーロッパに行つて、ヨーロッパ経由で日本に来ていのです。そういう近代仏教学を、明治初期に日本の先覚者がヨーロッパに留学して持ち帰り、それがどーっとした流れとしてまた厳然として流れています。現代日本の仏教世界には二つの流れがぶつかって渦巻きが起こっている、大変な渦巻きです。両者には矛盾した面もあり、かなり異質なもののなのです。この渦潮の中で、私、吉津も結果的に悩んでいるのだということです。

私は曹洞宗という伝統的な寺に生まれたのでどちらかというと大仏・大法・大僧の伝統の方から仏教を学び始めました。先ほど大野先生が私の紹介をしてくださったよう

に、私の専門は東大寺のあの大きな仏様、大仏様、その根本にある教学である華嚴学です。私の研究はどちらかといえば伝統的な研究ですが、『華嚴経』にもサンスクリットやチベット語のテキストもあり、先学の研究成果もありますので、私もやはり明治に伝わったヨーロッパ経由の近代仏教学の恩恵を受けながら研究をしているのです。

こちらには道元禅師の研究をなさっている先生もたくさんおられますけれども、その方々も状況は同じなのです。研究対象は日本の伝統的な仏教を対象にしておられても、近代仏教学のパーリ語、サンスクリット語、チベット語等の成果を参照しないでやっておられる方はたぶん一人もいない。みんなこの渦巻きの中で、私たち日本の仏教徒は、一体仏教とは何か、伝統的なものが良いのか、近代仏教のお釈迦様の方の言葉に近いパーリ語とか、あるいは大乗仏典を書いた言葉であるサンスクリットか、伝統的な立場を残しているチベットという言葉による仏教が正しいのか、などと悩んでおります。今皆さんが図書館などで仏教の本棚をちよつとのぞかれただけでも、いろいろな立場の方がさまざまな仏教の本を書いておられるということをよくご認識

ではないかと思えます。

大仏・大法・大僧について簡単に申し上げます。今、世界の中で生きている仏教をあえて大きく分けるとすると、まず、スリランカ・ミャンマー・タイ・カンボジア・ラオス等の上座部という学派があります。部派仏教と申します。以前は二十ぐらいの学派があったのですが、現在は上座部だけが残っています。お釈迦様からの伝統を私たちはまっすぐ受けているのだという自信に満ち溢れた仏教です。この関連の仏教の本も現在は日本語でもたくさん出ています。その上座部という仏教と、もう一つが大乗仏教です。特に大仏、大法、大僧と大の字をつけているのは、この大乘の流れであるところご理解いただきたいと思えます。大乘経典の中でも、皆さんは『般若心経』をよくお読みになりますでしょうか。先に言及した『華嚴経』、もつと有名なものには『法華経』、『浄土三部経』、『大日経』などたくさんあります。どんな経典も釈尊に由来するというのですが、大乘経典では阿弥陀仏・薬師仏などの釈迦仏以外の仏様も多いのです。そして、共通していることは、大仏、大きな仏様の存在です。大乘は大きな乗り物、一切衆

生が乗って全員が仏の教えに与る立場で、特定の人だけが乗れる教えではないので、ともかく大きな力、救済力を持った大仏が出てくるのです。

皆さん方は、アフガニスタンでタリバン勢力が、バーミヤンの大仏を機関銃で撃つて破壊してしまったのを覚えておられるでしょう。あの破壊された大仏は典型的大仏です。そういった大仏の流れが中国から朝鮮半島を経て、そして日本にまで来ていることを、宮治昭氏が『仏教美術のイコノロジー——インドから日本まで——』（吉川弘文館）で明らかにしています。日本では東大寺の大仏や鎌倉の大仏など目立つものもありますが、図像的にはあまり大仏は活性化しませんでした。むしろいつも肌身離さず持つて歩く小さい仏とか、本尊という存在が活性化しますが、決して大仏の理念は失われていないのです。後に説明します、日本仏教で成立した大僧の中心に一切衆生を救済する大仏の理念は生きております。

大きな法である大法は中国で成立したと思われれます。インドでは部派仏教と大乘はお互いに批判しあいました。大乘は部派を小乗と呼び、役に立たない、卑小な仏教と軽蔑

します。逆に部派は大乘を非仏説と糾弾し、お釈迦様の教えと関係ない、捏造の仏教だと言いつ返すのです。インドでは部派仏教が主流でした。ところが中国に来ると大乘が主流になりました。その影響で朝鮮半島から日本に展開した仏教も大乘主流ですね。

また中国では、インドでは考えられないことが起きました。それは小乗も大乘も共に仏説であるというのです。これは、仏教には二つの異質な仏教が存在していて、お釈迦様は信じられないという儒教からの批判に対抗して、大乘・小乗共に釈迦仏の教えであり、矛盾などないと言いつ返したことによります。

また、中国自体で成立した禅宗は經典を中心とした学派仏教を批判して、師弟が問答により直接に覺りを開くなどと主張しました。その問答が語録になっていきます。その語録が次第に經典と同様の聖典になると、中唐の宗密などは教禅一致説、教学も禅宗も違いはないなどと主張し、その影響は宋代から強くなり、インドからの經典も中国人の著作も、また禅宗文献も一緒に編集されて、大藏經、漢訳大藏經、中国大藏經が成立します。これは莫大な教えの集大



成であり、これを私は大法と呼ぶのです。この大法を朝鮮半島の諸国も日本も受けております。今の日本でもまだ音読のお経が有力なのですから、中国仏教の影響は大きいです。すね。

さて、大僧は日本で成立したと思います。日本の宗派は南都、奈良の仏教の六宗から始まります。華嚴宗が中心でした。聖武天皇が発願したのです。平安二宗、すなわち最澄による天台法華宗、空海による真言宗も日本で独特に成立しました。南都六宗と平安二宗を加え、八宗が正当な仏教とされていましたが、法然が浄土宗を主張してから、天皇の許しなくても宗派が成立します。曹洞宗もそうです。すね。

日本は宗派が多いですね。これくらい宗派の多い仏教国はないのです。良い意味では仏教のメニューが多く、いろいろあつて選びやすいともいわれます。中国や韓国と比べた場合、当地では学派や禅宗は存在しますが、全体的には「仏教」という意識が強いのです。ところが日本では、仏教よりも宗派、宗旨が優先します。「おたくのご宗旨は何ですか」と聞かれ、「念仏です」、とか「日蓮宗です」と

#### 私の仏教学（吉津）

か答え、「仏教です」とはほとんど言いませんね。

日本の仏教は非常に教団が強い。この結束の強い、かなり排他的な教団のあり方を私は大僧と呼ぶのです。この排他的というのは問題点でしょう。日蓮は浄土宗などを厳しく批判したことは有名ですね。道元でも『弁道話』の中で「念仏は田んぼでカエルが鳴くようなもので、修しても益なし」と言い切っています。法然が聞いたらおこりますね。その法然も天台や真言は聖道門であり、高い教えではあるが、穢土の末法では浄土門しか役にたたないと、歯に衣を着せぬ言い方です。同じ禅宗でも曹洞宗と臨済宗は批判しあいます。兄弟げんかがもとで徳川家康の策略で二分された浄土真宗の東西両本願寺ですら、次第に両派に教団に傾向の違いが出ています。

私も教団仏教がセクト的であることに批判的だったものですから、大学院時代に恩師の宮本正尊先生に申し上げたら、「吉津君、そう言うけどね、明治の初めの廃仏毀釈や神仏分離をどうにか切り抜けられたのはそれぞれの宗派が独自の努力をしたからなんだよ」と諭されました。なるほどと思つた次第です。

その努力の一環が仏教系教育機関の設立と了解する次第です。先週、大野先生とご一緒に高野山大学で行われた仏教系大会に参加したのですが、本当に日本の仏教系教育機関の多さはすごいですね。仏教の盛んな韓国では四つか五つ大学ができています。台湾でもそれ以下でしょう。日本では百三十年の間に、それぞれの宗派がもちろん危機意識を感じ、仏教と社会の問題を考えなければいけない、だから大学を作り、仏教者を養成しなければならぬということに頑張ってきています。この面では大僧というものも良いところがあるわけです。

時間の関係もありますから、C「二つの流れへの対処の仕方」に移りましょう。近代仏教学がやってきまして、どんな問題点があるかという点、今さっきも言いましたけれども、これは伝統的な仏教学も実は日本に伝来した時は同じ状況だったということです。つまり文化と一緒にやってくるということです。中国の儒教や文化と共に仏教はやってきたのですが、近代仏教学もヨーロッパ近代文明と共にやってきた。

仏教だけがやってきたわけではありません。日本には全く

それまで無かった新しい政治体制、経済、科学技術、教育、芸術、スポーツなども一緒にやってきました。江戸時代の人は野球はやっていなかったわけです。サッカーもやっていなかった。お釈迦様は一切智者と申された、何でも知っておられるのだということです。しかし、お釈迦様は新幹線を知らなかったのです。あまり大した冗談ではないのですが、若い教員だった頃、これを言ったとたんに前に座っていた女子学生さんが大いに笑ってくれたのを思い出します。

近代仏教学は、近代文明と共にやってきたのです。ですから私たちの悩みもまた深いのです。仏教だけのことを考えているわけにはいなくなりました。寺に生まれて、仏教学を専門にしている私の悩みもここにあります。これらの悩みにいかに対処したらよいのかをお釈迦様にうかがってみたいと思います。その結果が本日の表題に出している自洲と法洲の対峙の実践です。講演の始めに対峙とは対話であり、自洲と法洲の対峙も自洲と法洲が対話することだと申しましたが、これをいかに実践するかをお釈迦さんに尋ねてみたいのです。

詳しく引用文をお知りになりたい方は、中村元先生がパリ語から翻訳され岩波文庫から出ている『ブツダ最後の旅』のポイントの部分、私が引用した部分に接してもらいたいと思います。

お釈迦様は八十歳まで長生きされました。最後の安居あんご、ご本山に修行に行くことも安居と申しますが。雨が降る時期になりますと、あまり修行者たちは外を出歩きません。雨が降りますと生き物がぞろぞろ出てきますので、修行者が歩き回って生き物等を踏み殺してはいけないという、インドの宗教者に一般的な風習です。三ヶ月半くらい屋内で修行する時期がやってまいりました。その最後の安居の時に、お釈迦様は発病されました。ただお釈迦様は日頃からの修行力が備わっておられますから、そのときは良くなるのです。そのときにそばについていたアーナンダ、この方はお釈迦様のご親戚筋であり、最後までお釈迦様の面倒をみた方です。アーナンダがこのままお釈迦様が亡くなられたらどうしようという思いで、「尊師、元気になられまして、安心しました」と言ったとたんに病気から元気になられたお釈迦様が、怒るようにアーナンダに言ったのが

私の仏教学（吉津）

この一節なのです。

どのようにアーナンダの思いを見抜いたのでしょうか。私が想像するに、お釈迦様が亡くなられたらどうしようか、もつと世俗的に言えば、アーナンダは、お釈迦様は自分たちのリーダーであると思っっています。こう思うことに嘘はないです。ところがここで皆さん、読んでみてください。お釈迦様は「アーナンダよ、お前たちはどう考えているのだ。私は一度もあなたたちのリーダーであると思つたことはないのだよ」と言っておられます。これは重要なことだと思います。そしてお釈迦様はこうもおっしゃっている。「あなた方が私を頼りにしているなどと私は一度も考えたことはない。だからアーナンダよ、お前ははっきり言わないが私が死んだ後の後継者を指名し、遺言してから亡くなられるだろうと考えているならとんでもないことだ」というような雰囲気伝わってくる文章です。

その後「私は八十歳になった」と自らおっしゃっているわけです。ここで八十歳だとおっしゃっているから、お釈迦様が八十歳で亡くなられたということがわかるのです。他に資料がない。意外にお釈迦様の伝記は判つたようで

からないので。良くぞここで言ってくれました。何も言わなかったらお釈迦様は何歳まで生きられたのかというのが問題になるところでした。

そこでおっしゃったのが「アーナンダよ、それ故にこの世で自らを島とし自らを頼りにして他人を頼りとせず、法を島とし法を抛り所として他の者を抛り所とせずとあれば」の一句です。これが本日の発表の題になっております。自洲・法洲の一つの原文でございます。自らを、自分自身を抛り所とする。そして教えをもう一つの抛り所にするのです。

この解釈もいろいろありまして、二つの抛り所と言っているけれど、実はお釈迦様が我見をたてるような教えを説くはずはない。自分を抛り所にするなどと言うことはおかしいのではないかという解釈をする方もおられます。しかし私はそうは考えません。お釈迦様の教えというのは誓って自分を大切にする宗教であったと私は信じます。もちろん、自己中心的で自洲とおっしゃったはずはないのです。自分を大切にすることとは自己中心であるということとはありません。自分を大切にすることは隣人も大切にす

る方であると思います。それが私の今日の講演の趣旨でもあります。

自分を大切にすることは、教えを学ぶということであり、また限りなく隣人、友達、先生たちから学んでいくのだ、ということが非常に重要なことだと思います。仏教はここに尽きるといふことでございます。「人生は無常であるから修行し、学び続けよ」といってお釈迦様は亡くなられました。

自洲・法洲はお釈迦様の残された文献にたくさん出てくるわけではありませんが重要なところで出てきます。そしてその教えの後で必ず四つのもをよく観察しなさいとの教えが続きます。また四つのもに対して執着していか、憂いは無いか、ということをチェックしなさいということを申されております。

四念処しねんじょの教え、身・受・心・法を念ねんじゆずる修行です。まず第一に身、カーヤとは私たちの体、身体が大切なのです。次の受は何をどう感じるか、感受、ベータナーということです。我々は感情の動物だとよく言います。体面が傷つけられた、あいつが気になる、苦しい、悲しい、辛い、寒

い、暑い、いろいろな感情を持って生活しています。

次に心の働きですが、心そのものがチツクです。第四の法、ダンマ(サンスクリットではダルマ)はいろいろな意味があり、法という言葉は仏教では多義的です。この法は自洲に属し、私たちの心で考える物事すべてを指します。自洲に対する法洲という法は教え全体という意味です。

この四念処の一つとして、お釈迦様がいろいろな事柄について頓着していないか、執着していないか、チェックして観察しなさい、よく気をつけてみましょうと勧めておられる。教えの基礎になるのが私たちの存在を含めた物事であり方が教えなので、法念処の法と法洲の法とは無関係ではないのです。しかし、ここではお釈迦様の教えを総括する法洲と、もろもろの事象としてのダンマ、物事の意味のダンマとは区別します。自分の心なり、頭なりで考えることは自洲としての法であるが、教えは法洲として厳然として自洲の前に存在している。私たちはブツダの説かれた教えだけを考えているわけではなく、いろいろの事柄を考えます。それらが法念処の法です。法洲はお釈迦さんの説かれた、あるいは祖師方の教えとして厳然として自洲

と対時的に存在し、対話的に関わる存在なのです。

この四つをよくチェックする。そのチェックする際に映す鏡のような役割を法洲が果たすと思います。不浄・苦・無常・無我などの基本的な教えです。我々の体に問題はないだろうか。我々が社会生活で感じていることに執着し、何か引つかかっていることは無いかかとチェックします。我々は心という靈妙なものをもっているのだけれども、何か心配していることは無いか、悩んでいることは無いか。

若い方どうですか。あるいはこの素晴らしいキャンパスで学びながらもいろいろ悩んでいることもあるかもしれませんね。

私はこの四念処の実践について、身体と感覚である受ですね、それから心と法というものを現代的に少し広げて解釈しております。体といいますが、この体だけでは生きていけません。私たちの体は自然物です。自然とつながっている。皆さんと空気を共有している。大地がなかったら歩けません。早く到着したので素晴らしい日進校舎を歩きました。向こうに葉草園もあるのですね。初めて来ましたが、けれど広いですね。駒澤大学は本当に狭いのでこの大学が

羨ましいです。学生諸君、この自然を満喫してください。

身体は自然なのです。ですから環境問題と繋がっているのです。皆さん、タバコは喫煙場所で喫煙していますか。

これは非常に重要なことです。タバコ一本吸うことがどれだけ生態系に影響を与えるかという問題があります。私もヘビースモーカーでございましたが、吸っていた時はそんなことは考えませんでした。最近、いろいろな食料問題が起きますね。人間の欲望がとんでもない食品問題を引き起こしています。この社会的チェックも身念処の中に入れて考えたいものです。

感覚であるヴェーダナーは広く人間関係のチェックです。周りの人間関係というのは心の働きを通わせながら生活しているではないですか。好きだ、嫌いだ、苦しい、楽しいと言いながら、私たちはお互いに夫婦生活を行い、社会生活を送っています。思わぬことを思わぬ人が言う、それにびつくりしながら生活している。

私も今、駒澤大学学生部で仕事をしているのですけれども、本当にいろいろなことが起きます。驚くべき人間の生き様です。これが全部、感受性になって、身体にも関係し

てくる。身は、身口意の三業という我々の行動の主体として考えられます。行動においては何をやるか、やらないかの一念は心の中から起きてきます。

今のタバコの例で言えば、タバコを吸いたくなつたというのは心の動きでしょう。実際に吸う、それは身、体の動きです。身業です。吸いたいという心の動きをどのようなマナーとして実行するかというところに、三番目の心のところから、善悪二業の動きが出てくるのです。これは良い行いであるとか、これはいけないよと、仏教はなるべく良い、悪いを分けるような発想をしないようにするのですけれども、人間は社会の中で生きていますから、迷惑をかけるはいけないので、善悪をはっきり言わなければいけないときは明確に発言しなくてはなりません。

そして最後の法ですが、これはあらゆることが関わってきます。お釈迦様の時代には無かった現代、近代の諸問題が出てきております。環境問題はあったでしょうか。人権問題はあったでしょうか。資源の問題はどうだったでしょうか。私たちはたちまちそういうことを考えなければいけない時代に生きています。ですから仏教を勉強する、ある

いは仏教を勉強しない人でもそういうことを抜きにして生活することはできないのです。それぐらいに広げて四念処を考へて行きたいと思います。

D 「三つの判断（事実・価値・対峙）と対話性（対峙）への努力」ですが、三つの判断があると想定します。一般的には二つです。事実を事実として見ていく事実判断です。これは善悪を問わない。悪いことであれ、良いことであれ、すべて事実が事実として認定していくというのが事実判断です。

次にあるのが価値判断です。皆さんがどんな価値観を持つか。若い方は若い方なりに価値観があるでしょう。岩波書店の辞書に改訂版が出ていますね。皆さん方が使っている言葉もどんどん入ると思います。私には使えない、分からない言葉も入るのではないのでしょうか。時代の変化により、言葉も変わり、価値観も変化します。

事実判断のほうを英語でいうと、「andの論理」といたしました。a and bですね。そして価値判断はどうしても、善悪是非、良いか悪いか、あるいは賛成か反対か、これらの選択があるわけです。これを英語で、「orの論理」

とします。a or bの形ですね。この価値判断が行き過ぎると、次に問題にする原理主義になり、仏教に正邪を求めたり、安易に人物観に善悪を持ち込んだりすることになります。行動においては善悪を判断しなくてはならない場合もありますが、この判断を全面的に否定するのは行き過ぎですが、乱用は慎むべきだと思います。

それに対してもう一つ加えたいのが、副題になっております対峙という対話的判断です。これは *versus*（バーサス）という言葉を略しまして *vs.* です。「*vs.*の論理」ですね。巨人 *vs.* 阪神戦です。野球にかぎらず、スポーツはある一定のルールの下でゲームを行う。勝負は結果です。一つ一つのプレーに意味があります。スポーツは勝負に拘らず、全力で戦い、金銭が動く商業主義でなければ、極めて対峙、対話的であり、健全であると思います。対峙の論理を対峙判断という形でここに書きましたが、対話を活性化させ、相互の認識を深めよう判断として、第三の判断として取り入れたいと提案したわけです。

今日の話の最初に申し上げた通り、仏教は分かりにくいかもしれませんが、人間と人間がお互いに理解しあ

うことだと思えます。人間と人間がお互いに理解することを通して、自分自身の理解を深めて行く。こういうことではないかと考えます。それによって世の中に平和を実現していく。仏法僧三宝の僧宝、それはサンガです。和合です。仏教の目指すものはそういう和合、そういう形の平和。決して戦いではないと思えます。これは家庭の中においても同様です。私はお釈迦様の自洲・法洲、つまり自身を大切にしてお大事にして、そしてもう一つ教えがあるので、というところを大切にしてお、四念処の教え等を実践していけば、良い人生を送ることができる、善い社会が実現するとお釈迦様は教えてくださっているのだと思っております。

E 「仏教原理主義、宗派原理主義への異議」のところは、私の目から見まして、やや価値判断が強くて、対話性では無い本を挙げました。この縁者の方にはご迷惑かもしれませんが、学術的な視点からの問題として私は考えました。たとえばブータンの仏教は全面的に素晴らしいと言います、日本の仏教はダメと一方的に判断したり、あるいは仏教は慈悲の教えで素晴らしいが、キリスト教やイスラム教

やユダヤ教は殺戮の宗教であると決め付けるような本は対話にはならないのではないかと思うわけです。対話が成立するにはお互いに認めあつて、良いところは良い、問題点は問題点として認識を深めて行くというのが学問的でもあり、建設的ではないかと思えます。私がそれを十分に実現しているというわけではありません。これから実現したいという夢を持って努力していくことを誓い申し上げます。

\* \* \*

吉津先生ありがとうございました。ご質問はございますか。

### 質問

対峙という言葉が耳慣れない言葉で、対立とか対話は良く聞く言葉ですが、あえて先生は対峙の論理と言われたのですが、認識を深めるということになってくるのでしょうか。



少し話を交えますけれども、後ほど対峙ということに関係してくると思いますが、先生は『修証義』の本を出していらつしやるということで、前々から読んでいて、『修証義』の「菩提薩埵四摂法」の教えに、「同事」という言葉が出てくるのですが、そこがひっかかっています。「同事」と言うは不違なり、自佗は時に随うて無窮なり」と最後にありますが、対峙というのは自洲と法洲の対峙というよりも、私の中には自と他の対峙という、自分と他人でもよいのですが、自分と他、他者との対峙があると言った場合に、どういう関係があるのか分からない。関係があるのではないかという気がしているのですが。

答え

私は関係付けて考えております。「同事」というは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり 譬えば人間の如来は人間に同ぜるが如し 佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし」というところがポイントだと思っています。

佗をして自に同ぜしめてというのは、自分が他を理解する、受け入れる。受け入れて、そして次に自分が自をして

佗に同ぜしむる、自分が他にむかい意見を言ったりする。その道元禪師がおっしゃっている自他の方向性が私のいう対話的対峙と通じるところがあると思います。ただ、私の自洲と法洲との対峙の学び方は道元禪師の同事行よりもきついかもしれませんね。今の道元禪師のおっしゃられる同事の受け入れ方は慈愛に満ちた人間関係の構築には素晴らしい教えだと思えます。

私の対峙は仏教学という土俵の上で、法洲をいかに認識するかという問題意識が表に出ていますので、要するに法洲を事実認識として受け入れて、そしてそれに対して自分がどう考えていくか、ということがあり、対峙というのはじめをつける面を強調しすぎていますね。しかし、対立という言葉は避けたいのです。対立という価値判断、対立の論理に傾斜するわけです。S.の論理は、O.の論理とは違うのだと言いたいのです。そこでS.との違いを出すために、対立とは言わないで、対峙と言うわけです。相撲で例えれば、司会者が行司役をしてくださって、あなたが質問をしてくださっている。私たちは同じ土俵の上で一定のルールに従って相撲をとるわけです。勝敗は別にして、立

会いから組み合つて、力の限り押し合います。このところは私の言う自洲・法洲論と道元禪師の同事が通じるところではないかと思ひます。司会者である行司さんは「この勝負あがり」と宣言してくださいるのではないかと思ひます。あなたが質問をしてくださるのではないかと思ひます。その質問の趣旨を理解して、応答し、また一段と私の意図を理解していただくとうし、また自分の考えも深めるところに、共通点を見出しうらと思ひしだいです。

### 質問

自分が受け入れた場合に、自分も自ずと理解されるとうか、それが後についてくるとうかということなのでしょうかね。例えば人間関係ですが。

### 答え

自分がどれだけ質問を理解するかということによつて、答え方がまた良くなるとうかということでもあり、私の説明を受け入れていただくいて、さらに一段と深い質問なり、鋭い質問をしていただくとう、またそこで禪の問答のようなことになるとう。

### 質問

禪宗では「不立文字」と言われますね、いわゆる言葉を使わずにただ坐れと、坐禅などすると言われますね。ただし臨済宗でよくする禅問答ということもあると、それは言葉を使つて禅問答するのですから、その禅問答と不立文字とはどのように考へたらよろしいでしょうか。

### 答え

道元禪師は二つあるとはつきり言われています。『学道用心集』の最後のところ、「右、身心を決択するにおのずから両般あり。参師聞法と工夫坐禅となり」と言われています。坐禅をしなさい、そして師匠の教えを受け、教法に耳を傾け、ちゃんと勉強もするようにということです。文字を立てるとはおつしやいませませんが、道元禪師は不立文字を『正法眼蔵』で批判されます。教法はきちんと学びなさいとう立場ですね。そして經典祖録の勉強は大切であるとう考へておられたわけです。しかし、文字の熟達者になれとうは言つていません。文字の法師を道元禪師は嫌うのです。この道元禪師の立場と今日お話しした自洲・法洲の実践とは矛盾はしてないと思ひます。